



ほうさ 第27号

1986年7月

名古屋市蓬左文庫
Nagoyashi Hōsabunko

展示屋 よ り

近世人の異国

7. 12(土)~9. 14(日)
[8. 14(木)・15(金)展示替休室]

コロンブスの新大陸発見(1492)から半世紀、ポルトガル人の種子島漂着(1543)によって世界史に登場した日本は、約一世紀後の寛永18年(1641)、鎖国令によって、キリスト教の禁止、日本人の海外渡航の禁止、外国貿易の統制という、徳川幕府による対外関係の独占と統制の体制を確立することになった。この後安政元年(1854)の開国までの約2世紀間、日本と外交関係のあったのは、オランダ、中国、朝鮮、琉球の四ヶ国である。オランダと中国については、貿易の相手国として認められていたものの、正式な国交関係は成立していなかった。貿易船の発着や商取引は、一般の日本人から隔離された長崎の出島に限られており、幕府の許可なく出島を出ることは許されなかった。滞在中のオランダ人が日本を見る機会は、将軍への拝謁と、献上品を贈るために定期的に行われたオランダ商館長の江戸参府だけであった。その一方で、幕府は、長崎に入津する中国船、オランダ船から唐風説書、阿蘭陀風説書を提出させて、最新の海外情報を入手していたのである。

一方、それぞれ、対馬の宗氏、薩摩の島津氏を媒介に、貿易を行っていた朝鮮・琉球との間には、正式な国交関係が成立していた。(琉球については、中国からは独立国としての扱いをうけていたが、実際は、薩摩藩の支配を受ける変則的な地位にあった。) 朝鮮からは、将軍の代替りの際に 400人を越える朝鮮通信使の大使節団が、琉球からは将軍代替りの慶賀使と琉球国王即位の謝恩使が訪れ、江戸参府を行っている。特に、朝鮮通信使の応接は、幕府、諸藩にとって一大国際セレモニーであり、街道をゆく異国風俗の大行列は、幕府の威信を内外に示すものであった。大坂をはじめ通信使の通る宿場や城下町では、各地の文化人との詩文の交換が盛んに行われ、通信使の行列を描いた絵画などと共に、こうした詩文集も数多く残されている。

ところで、北方、蝦夷地では、松前藩とアイヌの間で交易が行われており、17世紀の末には、昆布、干鮭などの海産物が大量に大坂の市場に登場している。18世紀半ば、ロシア人が千島に進出しはじめると、アイヌを通じて、ロシアの品物が入ってくることもあり、「赤蝦夷風説考」等のロシア人を描いた書物も登場するようになる。さらに、漂流によりロシア船に捕縛され、ロシア本土を訪れることとなった日本人もあった。

このように、江戸時代の人々が、外国および外国人に接する機会は、限られていた。大部分の日本人は、一生に一度、外国人を見ることもなかったであろうし、西洋人などは、「異人」という言葉に象徴されるように、この世の物とは思えない存在であったとしても不思議はあるまい。しかし、それだけに、外国に対する興味、関心は強く、特に知識の間では、限られた機会を捉えて、想像以上に正確で多様な情報が入手されており、出版されたもの、写本によって流布したものも合せ、数多く書物が著されている。

17世紀の後半には、鎖国以前の日本人の海外進出で得た情



「四十二国人物図説」

報をもとに、西川如見「華夷通商考」に代表される海外諸国の物産の調査を中心とした商業貿易上の知識を得るための書物がつくられている。しかし、18世紀に入ると、将軍側近の学者であり、正徳の治を推進した政治家新井白石が著した「采覧異言」（日本人による最初の組織的世界地書）「西洋紀聞」（来日したイタリア人宣教師シドッチ尋問の記録）のように、幕府の外交政策の資料としての性格を帯びたものも現れてくる。また、西洋諸国の中で、唯一通商関係のあったオランダとその通商国についての知識を得ようとする要求に答えた森島中良の、「紅毛雑話」や司馬江漢の「和蘭通舶」などの書物も著されている。



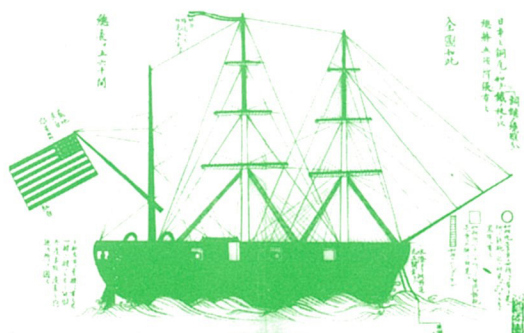
「吐火羅國則宝島図」(『資治雑笈』の内)

18世紀も半ばをすぎると、ロシヤ船をはじめ外国船が日本の沿岸に出没し、海防問題がクローズアップされ、沿岸警備や蝦夷地の調査が盛んに行われるようになると、外国関係の書物の出版が急激に増えてくる。ロシアをはじめ西洋諸国の地理・歴史書、漂流民の見聞記、蝦夷の地誌などである。そして、嘉永6年(1853)のアメリカ使節ペリーの浦賀での開港要求を機に、アメリカ、イギリスに関する書物が驚くほどの早さで幾種類も出版され、一方では、黒船来航の一部始終の記録が全国に短期間に広がるという現象が起きるのである。

当蓬左文庫の前身である尾張藩の御文庫に外国関係の書物が収集されるにあたって、18世紀半ば以降の海防問題の浮上と幕末の外国船の来航が契機となったようである。幕末の尾張藩主慶勝自身の蔵書印のあるものもいくつか見られ、また天保年間に名古屋城内に開設された蘭学塾、尾張洋学館に備えつけられたオランダ語の原書の一部なども、現在は当蓬左文庫に所蔵されている。

最後に、外国関係の文献ということでは、水野正信の旧蔵書について紹介しておかねばならない。水野正信は、尾張藩の重臣大道寺家の代々の家臣で、文化14年(1817)に13才で出仕してから、明治2年(1869)に65才で没するまで、当主の側近として仕えたい。このため、尾張藩主の参府の際には主人に従って江戸へ赴き、元治元年(1864)の長州征伐にも参加している。彼の主人大道寺操山が「自壮好読、必写之」と評し、自分自身も「筆の滴」などの膨大な著作で知られる細野要斎(明倫堂教授)が「昼夜筆を把て間絶なし」と記したほどの書物好き、記録好きの人物であった。彼の蔵書は、御子孫の手から、大正三年(1914)頃、当時の蓬左文庫に寄贈され、現在も当文庫に所蔵されている。約550冊に及ぶ蔵書の主要部分は、彼の出仕の年と相前後して文政元年(1829)頃から始って、明治元年(1868)に至る、当時の世相を記録した「青窓紀聞」(204冊)、「采覧異言」や「環海異聞」(漂流記)などの外国関係の著作を集めた「青黠叢書」(103冊)、「資治雑笈」(94冊)である。正信と同時代の尾張の人物には、彼同様に書物・記録好きの人物が多く、同好会を作っていたほどで、彼らの間では、お互いに記録や、書物を交換して写しあうこともあった。正信と交友のあった主な人物には、「金城温古録」を著した尾張藩下級藩士奥村得義、尾張藩右筆の職にあった安井重遠、芸能・風俗関係の著作を多く残した小寺玉晃等があり、それぞれに「松濤棹筆」「夏南破男志」「王冕雜記」などの「青窓紀聞」と同様な記録を残している。これらには共通して、ペリーの浦賀来航についての記録が収録されているが、膨大な外国関係の文献を書写し、収集したのは正信だけである。特に、蝦夷や海防関係の書物が多く、全国的にも珍しい存在であったようで、医師であり、著名な博物学者であった伊藤圭介や、蝦夷研究で知られる

松浦竹四郎などが、閲覧を乞うていることでもわかる。彼が多く外国関係の書物を写すことができた理由としては、主人の供をした江戸や京都行きにおいて多くの書物を見ることができたのと同時に、常に江戸や京都、越前などから情報を送ってくる人物が存在したことによる。しかし、彼が外国関係の文献を膨大に収集した理由については、はっきりしない。彼自身の職務となんらかの関連があったのではないかと、推測するだけである。それは、書物の筆写に生涯をかけた人物に、時代の課した要請だったのかもしれない。



「蕃船之図」

近世における外国関係書略年表（地誌・歴史）

年	代	編著訳者名・書名	関連事項	文化5	1808	佐藤信淵「西洋列国志略」(刊)	○フェートン号事件 ○間宮林蔵、樺太探検 ●英、マカオ攻撃
寛永16	1641		○鎖国の完成				
20	1643		●蘭、マラッカ占領 ●朝鮮通信使来朝 ●英、この頃清教徒革命 ○朝鮮通信使来朝	6	1809	高橋景保「北夷考証」 間宮林蔵「東轅紀行」 馬場貞由「東北轅輶諸国誌野作 難記訳説」(刊)	
明暦1	1655	額川藤左衛門「諸国土産書」 西吉兵衛「異国産物記」		7	1810	古屋野意春「万国一覽図説」(刊)	●南米イスパニア植民地独立運動 ○露艦長ゴローニンを捕縛 ○朝鮮通信使来朝 ●英、バタヴィア占領 ●清、西洋人の内地居住、布教を禁止 ○露艦、高田屋嘉兵衛を捕縛 ●ナポレオン露遠征 ●仏、王政復古 ●英、シンガポール領有 ○シーボルト来日 ○英捕鯨船員、常陸、薩摩上陸 ○無二念打払令
天和2	1682		○朝鮮通信使来朝 ●フィデルフィア市建設 ●仏、ルイジアナ植民 ●英、名誉革命 ●英仏植民地戦争 ○独人医師ケンペル来日	8	1811	馬場貞由等「厚生新編」 「朝鮮人物旗仗輿輿之図」	
元禄1	1688			9	1812		
2	1689						
3	1690						
8	1695	西川如見「華夷通商考」(刊)					
宝永5	1708		○伊人宣教師シドゥチ来日	文政4	1821	伊能忠敬「大日本沿海輿地全図」	
正徳1	1711		○朝鮮通信使来朝	6	1823	荒井廉平「翻刻成初新志」(刊)	
3	1713	新井白石「采覧異言」		7	1824		
5	1715	〃「西洋紀聞」		8	1825		
享保4	1719		○朝鮮通信使来朝 ●清「皇輿全覧図」成立 ○洋書輸入の禁を緩和	8	1825	吉地林宗「輿地志略」	
5	1720	新井白石「蝦夷志」 西川如見「四十二国人物図説」(刊)	○倭約令 ●ペーリング海峡発見 ○露艦、千島・樺太探検	9	1826	〃「輿地志略」	
9	1724	今村市兵衛等「和蘭問答」		10	1827	〃	
15	1730			11	1828		○シーボルト事件
18	1735			12	1829		○シーボルト帰国 ○英艦、東蝦夷地に来航
元文2	1737	北島見信「紅毛天地二図覽説」	○露艦、安房沖に来航 ○朝鮮通進使来朝	14	1831		
4	1739			天保7	1836	小関好義「新撰地誌」 渡辺華山「新撰輿地全図」	
寛延1	1748			8	1837		○モリソン号事件
3	1750	小倉某「紅毛問答」		9	1838	大田南畝「沿海異聞」 高野長英「和蘭史略」 渡川六蔵「和蘭紀略」 宇田川榕庵「和蘭史略」	
宝暦7	1757		●ブラッシーの戦い ○朝鮮通信使来朝 ●ワット蒸気機関発明	11	1840		
明和1	1764			12	1841		
2	1765	後藤梨春「紅毛談」(刊)		13	1842		
8	1771	本木良永「和蘭地図略説」	●米、独立宣言 ●英、この頃産業革命 ○露人、蝦夷地(国後島)に来航、通商を要求	弘化1	1844	伊藤玄朴等「坤輿初問」	
安永3	1774	西村達里「万国夢物語」		2	1845	箕作吾吾「坤輿図識」(刊)	●アヘン戦争 ○天保の改革 ○外国船打払令緩和 ●南京条約(香港を英に割譲) ○江戸四谷角邸に大砲場設立 ○蘭王、幕府に開国進言 ●米、清と通商条約締結 ○仏艦、琉球通商要求 ○英艦、琉球通商要求 ●英、自由貿易政策実施 ○米使ヒットル浦賀入航 通商要求 ○海防の動議、幕府に下る ●アメリカ太平洋進出 ○島根、英仏に琉球開港 ●仏二月革命、ウィーン三月暴動、ペルリン三月革命、ハンガリー独立運動、イタリア革命運動 ●米、カルフォルニア金鉱発見 ○米人、松前漂着 ○英艦、浦賀入航 ●米、ハワイと通商条約
4	1775			3	1846	井上春洋「重墨竹枝」(刊)	
6	1777	本木良永「輿地国名訳」(刊)		4	1847		
7	1778	松村元綱「和蘭航海略記」		嘉永1	1848	無是公子「阿芙蓉叢聞」 山村昌永「西洋通覽」(刊) 長山貫「西洋雑記」(刊) 安積良斎「西洋小史」 茫洋子「洋外紀略」 「蕃史」(刊)	
天明1	1781	松前広長「松前志」 本木良永「和蘭陀海鏡書」 前野良沢「輿地編小解」 志筑忠次郎「万国管閑」 工藤兵助「赤蝦夷風説考」 前野良沢「魯西亜本紀」(刊) 前野良沢「魯西亜大統略記」(刊) 林平子「三国通覧図説」(刊) 〃「海国兵談」 桂川甫周「新製地球万国図説」(刊) 奥田元繼「外国竹枝詞」(刊) 佐藤行信等「蝦夷拾遺」(刊)	○大黒屋光大夫アリューション漂着 ○最上徳内、千島探検	2	1849	安部蘭甫「新宇小識」(刊) 烏有生「海外新話」(刊) 斎藤正謙「海外異伝」 永井則「泰西三歳正蒙」(刊)	
2	1782			3	1850		
3	1783			4	1851	杉田玄端「地学正宗」(刊) 箕作阮甫「八紘通誌」(刊) 魏源「海国図志」(刊) 清溪「坤輿外紀訳解」(刊) 荒木蒼「瑛珉紀略」(刊) 過不及齋「万国海路之記」(刊) 林健等「通航一覽」 新発田収蔵「各国所領万国地名 捷覧」(刊)	
6	1786			5	1852		○露船、下田入航 ○薩摩反射が建設 ○米使ペリー浦賀来航 ○露使プチャーチン長崎来航 ○幕府、開国の可否を諸侯有司に問う
7	1787	朽木昌綱「西洋錢譜」(刊) 森島中良「紅毛雑話」(刊) 〃「万国新話」	○寛政の改革 ●合衆国憲法制定 ●仏革命	6	1853	豊田亮「合衆国考」 時々夢斎「海外人物小伝」(刊) 清宮秀堅「新撰年表」(刊) 斎藤正謙「地学要要」 中山伝右衛門「海国図志墨利加洲部」(刊)	
寛政1	1789	朽木昌綱「泰西輿地図説」(刊) 最上徳内「蝦夷草紙」(刊) 林平子「海国兵談」(刊行) 司馬江漢「輿地略説」(刊)	○寛政異学の禁 ●朝鮮、洋学禁止 ○露使ラクスマン、大黒屋光大夫を護送して根室来航、通商を要求 ○松平定信、海辺巡察 ○林子平禁銅 ●仏、第1次共和制 第1回欧州同盟成立	7	1854	塩谷甲蔵・箕作阮甫「翻英海国図誌」(刊) 広瀬達「亞米利加総記 正・続・後編」(刊) 正木篤「墨利加洲沿革総説総記補輯和解」(刊) 〃「澳門月報和解」(刊) 〃「英吉利国総記和解」(刊) 大槻重植「海国図志俄羅斯総記」(刊) 〃「海国図志夷情備采」(刊) 小野元清「英吉利広述」(刊) 皇国陽士「新国図志通解」(刊) 〃「西洋新墨誌」(刊) 〃「海外異聞(亞米利加新話)」 永田南溪「海外人物輿」(刊) 関蘭斎「改正海外諸島図説」(刊) 田川春道「外蕃容貌図書」(刊)	●太平天国の乱 ●オーストラリア金鉱発見 ○中浜万次郎等、帰国 ○露船、下田入航 ○薩摩反射が建設 ○米使ペリー浦賀来航 ○露使プチャーチン長崎来航 ○幕府、開国の可否を諸侯有司に問う ○日米和親条約 ○日英、日露、日蘭日仏和親条約 ○洋式船塢鳳凰丸起工 ●クリミア戦争
2	1790						
3	1791						
4	1792						
5	1793	桂川甫周「漂民御覧之記」 〃「魯西亜志」 〃「北棧開略」(刊)					
6	1794	近藤守重「伊祇利須紀略」(刊) 志筑忠雄「魯西亜志附録」 〃「魯西亜来歴」(刊)	●澳・普・露の第3次分割によりポーランド王国滅亡 ○英艦、室蘭来航 ○近藤守重等、エトロフへ派遣 ●仏ナポレオンクレーター ●蘭東インド会社解散 ○伊能忠敬、蝦夷地測量				
8	1796						
10	1798	本多利明「西域物語」 森島中良「類聚紅毛語訳」(刊) 大槻玄沢「蘭説弁啓魯夜話」(刊)					
11	1799						
12	1800	司馬江漢「地球全図略説」(刊)					
享和2	1802	山県蟠桃「夢之代」 堀田子俊「坤輿全図説」(刊) 山村昌永「訂正増補采覧異言」 〃「大西要録」(刊)					
3	1803						
文化1	1804	近藤守重「辺要分界図考」 〃「伊祇利須紀略提要」 〃「外蕃通書」 〃「安南紀略叢」 〃「阿媽港紀略叢」 〃「和蘭通舶」(刊) 〃「魯西亜志」 〃「魯西亜志世紀」 〃「亜細亞諸島志」 〃「華夷一覽図説」	○トラファルガー海戦 ○露人、樺太、千島襲寇 ○薪水給与令				
2	1805	司馬江漢					
3	1806	山村昌永					
4	1807	大槻玄沢 山村昌永					

(開国百年記念文化事業会編「時代日本人の海外知識に依る。年表上の太字は蓬左文庫蔵を示す。)

「近世人の異国」 出品目録

1. 新製輿地全図 大槻崇撰 箕作省吾訂 弘化年間刊 1軸
2. 地球万国山海輿地全図説 長久保玄珠著 山崎美成補 嘉永3年刊 1折
3. 万国地球輿地全図 安倍泰行撰 嘉永6年刊 1折
4. 地球輿地全図 同 刊 1折
5. 采覧異言 新井白石 江戸中期写(正徳3年序) 1冊
6. 増補 華夷通商考 西川如見 宝永5年刊 5巻5冊
7. 同 同 江戸末期写 5巻5冊
8. 四十二国人物図説 同 同 1冊
9. 紅毛談 後藤梨春 刊(明和2年序) 2巻2冊
10. 新製地球万国図説〔万国輿地全図〕 桂川甫周訳 大槻玄沢校 江戸末期写(天明6年序) 2冊
11. 紅毛雑話 森島桂川 刊(天明7年序) 5冊
12. 泰西輿地図説 朽木竜橋 寛政元年刊 17巻6冊
13. 殊域雜纂 亜細亜之部 渡辺規綱 写(文化5年序) 1冊
14. 環海異聞 大槻玄沢 江戸末期写(文化4年序) 15巻8冊
15. 漂流記聞 江戸末期写(嘉永5年序) 3巻3冊
16. 海外異聞〔亜米利加新話〕 嘉永7年刊 5巻5冊
17. 八紘通誌 箕作阮甫訳 嘉永4、安政3年刊 2編6巻6冊
18. 瀛環志略 (清)徐繼畲著 井上春洋等訓 文久元年刊 10巻10冊
19. 長崎図 八仙堂主人画 写(延享2年版) 1折
20. 肥州長崎図 安永7年刊 1折
21. 長崎紀聞 田沢春房 江戸末期刊(昭和5年貴重図 書刊行会複製) 2冊
22. 阿蘭陀風説書 嘉永3年写 3冊
23. 別段風説書 安政2年写 1冊
24. 迭魯乙多兎一世記抄訳 江戸末期写 1冊
- 24' 迭魯乙多兎戦図 同 1折
25. 横浜開港見聞誌〔横浜文庫〕 橋本玉蘭斎著 五雲亨貞秀画 刊(文久2年序) 3編3冊
26. 渡覧アメリカ人図 写 1軸
27. アメリカ人衣冠其外図〔異品〕 写 1軸
28. 和蘭フレガット船図 写 1折
29. 蘭船三百廿浦賀異船図 写 1折
30. 藩船之図 写 4枚
31. 青窓紀聞 水野正信編 江戸末期写 204冊
32. 資治雜纂 同 江戸末期写・刊 6輯94冊
33. 青牕叢書 同 同 112巻103冊
34. 玉晷雜記 小寺広路(玉晷) 江戸末期写 12冊
35. 夏南破男志 安井重遠 江戸末期写 43冊
36. 鶏肋集 同 江戸末期写・刊 23冊
37. 三国通覧図説 林子平 天明6年刊 1冊・附図5枚
38. 遊房筆語 伊藤龜年(藍田) 写(安永9年序) 1冊
39. 清俗紀聞 中川忠英(石崎融思等画) 寛政11年刊 13巻6冊
40. 阿芙蓉窠聞 写(弘化4年序) 7巻3冊
41. 夷匪犯境見聞録 江戸末期写 2冊
42. 朝鮮人物旗仗轡輿之図 猪飼正毅 写(文化8年識語) 1軸
43. 朝鮮人来朝道通り絵図 写 1枚
44. 朝鮮国三使口占聯句并別幅 写 1枚
45. 朝鮮人来聘新儀・同附録 江戸末期写 2巻2冊
46. 朝鮮人来聘之節差上物之目録・口上書 延享5、嘉永 写 2通
47. 朝鮮人来聘之節差上物之目録 写 1通
48. 朝鮮人来朝御大名衆御馳走御固場所 写 1枚
49. 朝鮮人来聘御馳走留 写 1冊
50. 朝鮮人饗応献立留 江戸末期写 1冊
51. 韓人唱和 江戸中期写 2巻2冊
52. 琉球人行列記 刊(天保3年序) 1冊
53. 蝦夷志 新井白石 (享保5年序) 1冊
54. 蝦夷拾遺 佐藤行信等 江戸末期写(天明6年序) 5巻5冊
55. 蝦夷草紙 最上常矩 寛政3年写 3巻3冊
56. 北蝦夷余誌 松浦竹四郎 刊(安政7年序) 1冊
57. 石狩日誌 同 刊(万延元年序) 1冊
58. 久摺日誌 同 刊(文久元年序) 1冊
59. 蝦夷地割図 同 写(自筆) 18枚
60. 休明光記 羽太正養 写 4巻4冊
61. 辺要分界図考 近藤守重 2巻2冊
62. 北蝦夷図説〔銅柱余録〕 間宮倫宗著 泰貞廉編 安政2年刊 4巻4冊
63. 訓蒙図彙 中村之欽(揚斎) 江戸末期刊 20巻・目2巻13冊
64. 和漢三才図会 寺島良安編 刊(正徳3年序)105巻・首尾各1巻81冊
65. Beknopt Leerboek voor de algemeene geschiedenis. Dr. J. A. Wijnne Groningen, 1856-57. 3v.
66. Handboekje voor de aardrijkskunde. Ritter 1v.
67. Kunstwoordenboek. P. weiland Dordrecht, 1846. 1v.
68. Nederduitsche spraakkunst ten dienst der scholen. P. Weiland Dordrecht, 1854 1v.
69. Algemeene Statistiek voor handel en nijverheid. D. Buddingh Haarlem, 1846-49 3v.
70. Beginselen der Statica. I. R. Schmidt Gravenhage; Amsterdam, 1823-24. 2v.
71. Reglement op de exercitien en manoeuvres der Infanterie. nagedrukt Nagasaki, Ansei 4 (1857) 3v.
- 71' 歩兵全書 名村元義訳 江戸末期写 10巻10冊

蓬左文庫の蔵書印

その20 松 平 君 山
吉 見 幸 和
織 茂 三 郎

君山と幸和は、近世中期の尾張を代表する碩学で、ともに八十歳以上の長寿をたもった。(幸和の方が数歳年長)いずれも、多くの門人を養い、著述にも富み、儒学や国学など、ひろい範囲にわたって、大きな業績を挙げたが、この二人の前後に、天野信景や細井平洲らを加えると、中期における尾張の学術の水準や普及度がかかなり明らかとなり、レベルもまた、高いことが知られる。

君山は儒学、幸和は国学をもって知られるが、ともに学問の領域がきわめてひろく、著書などもおびただしい数にのぼる。したがって、いずれも、中期における尾張文化の啓発者ならびに教育者として、こ

の時代におよぼした影響は小さくない。それらの蔵書は、いずれも、多少を問わず、この文庫におさめられ、君山のものは、とくに多く、大部分は自筆本とみられる。幸和のものもその子幸混のものもふくめて、なにがしか遺していることは注目に価すると思う。

さて、君山の蔵書は、この文庫に、自筆本や稿本などをふくめて相当数を遺しており、いろいろな漢籍の手写本を主としてきわめてバラエティに富む。他方、三の丸の東照宮の神官を兼ねる幸和の蔵書は、藩の保護のもとに、いわゆる「吉見文庫」の成立をみたが、遺憾ながら現存するものは少く、その目録(写本9巻)のみがいまなお、この文庫にのこり、文庫の全貌は、これによって、ほとんど明らかにすることができるであろう。

さて、君山の蔵書は、いろいろな漢籍に富むが、代表的なものに「秋の寝覚」や「弊帚集」のような随筆などもみられる。ほかに、「本草正詁」など、尾張本草学のさきがけをなしたものの、さらには得意とする詩文の交歓によって、朝鮮使節団の親善に、大いにつくすところがあった「三世唱和」などがある。君山の著書の数が多いこと、ならびに筆の速いことは、当時、及ぶべからず、とされていたようである。有名な「本草正詁」はじめ、本草関係の編著には数多い門人たちの助力も必要としたであろう。なお、君山には、藩命による「士林派廻」「張州府志」(幸和や信景らの「尾張風土記」を承けたもの)「朝林」などの、大物も少なからず、ゆたかなバラエティを示す。

一方、幸和については、「吉見文庫」が現存しないことが、いかにも措まれるけれども、目録だけでも全9巻、この文庫にほぼ完全なすがたを残していることは、せめてものなぐさめというべきであろう。目録の内容は、国書を主とするようであるが、これだけでも亡失をまぬかれたことは、よろこびとすべきであろう。著書として「神代正義」「尾張祠考」等がある。

ところで、君山の蔵書印は、別号の龍吟子より「竜吟」をとり、彼みずからの書には捺されていない。また、印はすべて券末に捺されており、巻頭には文庫に入ってから捺された「尾府内庫図書」印がある。下に挙げたのは「文房図賛」に捺されたもので、たて16mm、よこ17mmである。幸和の印は「吉見文庫」「幸和之印」「吉見幸和」があり、それぞれ「吏部王記」「同」「装束拾要抄」に見える。大きさは、各々、たて60mm、よこ21mm、たてよこ35mm、たてよこ21mmである。なお、材質は、残念ながら現品を文庫にみることはできないため、明らかにしがたいが、入念かつ綿密な観察を加えれば、ある程度は識別できるかも知れない。

(松平秀雲。号君山、龍吟子、富春山人、畫簪窩主人、吏隠亭、群芳洞等。御書物奉行をおよそ40年間にわたって勤め、文庫の蔵書中には彼の手になる題簽も多い。「吏隠亭蔵書目録」が現存。元禄10~天明3。)(吉見幸和。号恭軒、風水翁。神学、古典に通じ、生涯を通じて書写・読書に励み吉見文庫を建てる。延宝元~宝暦11。)(元名古屋市蓬左文庫調査研究員)



「竜 吟」



「吉見幸和」



「幸和之印」



「吉見文庫」

★次回展示のお知らせ

10月4日(日)~12月7日(日)「尾張藩主の蔵書~二代光友から四代吉通まで~」
(11月6日(木)・7日(金)は展示替のため休室)

出版物一覽

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S . 50年刊)	3,500円	名古屋叢書三編第12巻(S . 56年刊)	3,000円
名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S . 51年刊)	4,000円	同 第 8 巻(S . 57年刊)	3,000円
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(同)	2,500円	同 第16巻(同)	3,000円
尾崎久弥コレクション目録第一～三集		同 第19巻(同)	3,000円
(S . 52～55年刊)	各 1,500円	同 第17巻(S . 58年刊)	3,000円
名古屋叢書(正編)索引・総目録(S . 53年刊)	2,000円	同 第 4 巻(S . 59年刊)	3,000円
名古屋叢書続編 索引(S . 47年刊)	700円	同 第 9 巻(S . 60年刊)	3,000円
名古屋叢書続編総目録(S . 44年刊)	400円	同 第11巻(同)	3,000円
善本解題図録第一～三集(S . 55年再版)	各 300円	同 第18巻(1)	
日本の古典<蓬左文庫図録>(S . 52年刊)	200円	一横井也有全集 下(1)一(同)	3,000円
蓬左文庫・源氏物語図録(S . 53年刊)	300円	同 第18巻(2)	
蓬左文庫所蔵古地図複製 No.1～No.15(S . 55～61年刊)		一横井也有全集 下(2)一(同)	3,000円
No.14 中島郡(S . 61年刊)		同 第15巻	
No.15 葉栗郡(同)	各 1,800円	一尾張方言資料集一 (S . 61年刊)	3,000円
御本印型書鎮(S . 58年製)	1,000円	同 第14巻	
堀田文庫蔵書目録(S . 58年刊)	500円	一金明録一 (近 刊)	3,000円
蓬左文庫絵葉書<8 枚組>(同)	300円	蓬左文庫図録(S . 58年刊)	1,500円

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。(ただし、古地図複製は郵送不可)

▷▷▷ 利 用 ご 案 内 ◁◁◁

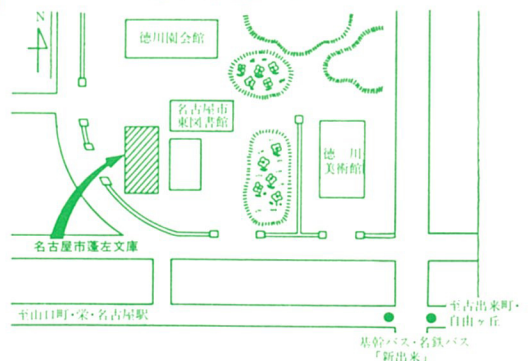
- ▷開館時間 午前 9 時30分～午後 5 時
- ▷休館日 毎月曜日・第 3 金曜日(館内整理日)
- 祝日 (日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)
月曜 〃 月・火休館
- 年末年始(12月28日～1月4日)
- ▷閲覧 館内に限り、館外貸し出しはいたしません
(閲覧料) 普通図書 無料
重要図書 有料(1部350円)
- ▷展 示 随時蔵書の一部を展示
(特別展を除き入場無料)
- ▷複写サービス 普通図書のうち、保存上影響のないものについて複写サービスを行います。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影の申請を受け付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052)935-2173

(<名古屋駅から> 市バス「基2」自由ヶ丘」行
名鉄バス「本地ヶ原方面」行
<栄から> 市バス「基2」引山」「自由ヶ丘」行
「新出来」下車、徒歩4分



「蓬左」第27号 ☆昭和61年 7 月12日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)
☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)